

大審問官の物語から

舞台は 16 世紀スペインのセビリア。そこに「彼」は突然姿を現した。不思議なことに、だれもがその正体を知ってしまう。人々は「彼」の周囲を取り囲み、「彼」もまた人々に祝福を与える。その姿を建物の蔭からじっと見つめる老人がいた。大審問官である。大審問官はただちに「彼」を捕え、神聖裁判所の牢獄の中で尋問する。「なんだってお前は今頃出てきたのか。お前には、お前が昔語ったことに何一つ付け加える権利は無いはずだ。」大審問官もまたその正体を見抜いていた。

大審問官は尋問を続ける。「我々がせっかく愛情をもってお前の偉業を修正し、自由の代わりに幸福を置いたにもかかわらず、お前は人間の心に再び自由の苦痛を負わせたいのか。人間の幸福は、奇蹟と神秘と権威の上に築かれるものである。お前が我々の邪魔をするのであれば、我々は明日にでもお前を異端者として火刑にできるのだぞ。」

尋問される間、「彼」は最初から最後まで沈黙を守っている。そして無言のまま、大審問官にキスをすると、そのまま夜の広場へと去っていく。

以上は、有名な「大審問官」(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』第 2 部第 5 編最終章)の粗筋である。無神論者のイワンが見習修道士の弟アリオシャに語って聞かせる創作物語だ。「大審問官」は、宗教文学や宗教哲学においてさまざまな議論を呼んできた。奇蹟、権威、神秘。大審問官の語るこの三つのものは宗教の本質をなす。人間はこの三つのものに我が身を委ねる。それが宗教的信仰に他ならない。宗教はこの三つのものを通じて人間に幸福をもたらした。しかし、その代償として、人間は自らの主体的な自由を見失った。「彼」はもう一度、その自由を与えようと、人々の前に現れる。大審問官はそれを断固阻止しようとする……。

この物語の中では、自由をめぐる三重のパラドックスが語られている。一つ目は自由と幸福が対置されるというパラドックス。二つ目は自由が人間にとって苦痛であり重荷であるというパラドックス。そして三つ目は、「彼」すなわちキリストこそ、人々にその自由をもたらすために現れたというパラドックスである。文学作品として、人間の実存における自由の問題を、これほど深く取り上げたものはないであろう。

不安は自由の眩暈である

人間が人間である限り、常に希求されるのが自由である。しかし、自由は人間をたえず不安におくものだ。身近な例で考えてみよう。飛行機は、空港に着陸する前、地上に近いところを水平飛行する。高度 100 メートルといえば着陸寸前の高さである。100 メートル下の地面がどんなに間近に見えるとも、我々は安心感を持って地上の様子を見下ろすことができる。乗客として安定した機体の中に座っているため、自ら落下することは絶対ないからだ。しかし、同じ 100 メートルの高さでも、高いビルの屋上の端から真下にある街路を見下ろした場合、話は全く異なる。どんなに強固な足場に立っていたとしても、どこか不安を覚えるのではないだろうか。不安の原因が 100 メートルの高度に、つまり外部にあるので

はないことは確かだ。それはむしろ内部に、すなわち、もしかしたら何かのきっかけで自ら落下してしまうのではないかという恐れの中に見いだされる。その恐れがほんの僅かな可能性しかなくても、それはやはり可能性なのである。自由とは可能性と結びついた概念である。そして、人間が自らの内なる自由を意識した時に感じる一種の眩暈。それが不安なのである。

深淵を覗き込むときに不安が生じる。キルケゴールは、『不安の概念』においてそのように述べた。深淵とは別言すれば罪であり、深淵への転落とは墮罪であるというのが彼の見方である。深淵を覗き込む人間は、墮罪前の無垢な人間(アダム)の姿になぞらえられる。墮罪後に生きる我々自身にあつては、罪は“原罪”と化している。それゆえ人間の可能性もまた、アダムにおけるような空想的な可能性ではなく、絶えず我が身を責め苛む現実的な可能性となっているのである。だが、そのように見た時に、深淵はもはや単なる罪ではなく、人間の可能性の謂いにもなっていると言えるだろう。

自由の可能性は人間の無限性を意味する。人間は霊的(心的)なものとの身体的なものとの総合であり、この両者を統合する第三者が精神である。人間とは本質的に精神として措定された存在である。これがキルケゴールの人間観だ。精神が自らの自由の可能性という深淵を覗き込み、恐れを感じてなにか有限なものにしがみつこうとする。そこに、不安が自由の眩暈となって現れるのである。

不安を正しく学ぶこと

イワンの語る大審問官は、異端者を厳しく告発し、時に火刑に処する迫害者である。しかし、この大審問官は「彼」を夜の広場の中に釈放してやる度量を持っていた。一方、不安はどんな大審問官も及ばないほど、どの人間に対しても容赦なき迫害者である。人間が人間であろうとする限り、不安という苛斂誅求から逃れることはできない。

けれども、不安というものを正しく学んだ者は、人間の可能性、すなわち自らの無限性により強化育成されることになる。この者にとっては、どんな現実も恐ろしくはない。なぜならどんな現実も現実であるかぎり、それ自体無限性である可能性とは違って、本質的に有限なものだからである。それゆえ、人間は自らの持てる力をそこに集中させて対応することができる。そして、何よりもキルケゴールによれば、不安を正しく学ぶことで初めて“贖罪”の道を歩むことが可能になり、そこに真の意味での宗教(キリスト教)の道が開かれるというのである。

奇蹟、権威、神秘。これらの中に安住することができれば、確かに人間は幸福であるかもしれない。だが、宗教的信仰として果たしてそれで良いのであろうか。内なる自由というものを我々が今一度自覚し、これを掘り下げることで、もしかしたらより深い次元での宗教的信仰を見出せるのではないだろうか。「大審問官」においては、自由と幸福は二律背反の関係にあった。しかし、宗教的信仰における真の幸福があるとすれば、それはまさに自由に裏付けられたものになるのではないだろうか。